

2024年8月18日聖餐礼拝

『わたしを覚えて』

ルカ22:19~20

聖書箇所

19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

導入：聖餐式の大切さ

みなさんおはようございます。今日は聖餐礼拝です。聖餐とは神様を信じ、イエス・キリストを救い主と告白する私たちにとって、とても大事な意味を持ちます。そこで、今日、私たちはこの聖餐の意味を改めて考える時間を持ちたいと願います。

このみことばは、イエス様が十字架にかかれる前夜、弟子たちとともに最後の食事をされた時のものです。イエス様はここでパンを裂き、ご自身のからだであると言われた後、わたしを覚えてこれを行いなさいという、命令をされました。教会は2000年間、イエス様のこの命令を守り、聖餐式を大切に執り行ってきたわけです。わたしを覚えてという本日のメッセージ題はここからの抜粋になるのですが、実はこの言葉は、聖書ではここにしか記されていません。最後の晩餐と呼ばれるこの出来事はマタイの福音書とマルコの福音書にも登場します。しかし、わたしを覚えてという表現はマタイの福音書にもマルコの福音書にも記されていないのです。なぜルカはここで「わたしを覚えて」という表現を記したのでしょうか。

その答えはルカの福音書という書物にあるように思われます。ルカの福音書はルカという弟子によって記されているのですが、彼は医者であり、科学者であった人物です。そんな背

景を持っていたからか、ルカの福音書は物事をよく観察し、詳細に記されている特徴があります。そして、そのことを通して彼が特に強調するのが弟子の生き方というものです。イエス・キリストを自分の救い主であると告白し、信じ、従い、キリストにのみついていくことは何を意味するのか、このようなことが強調されているのです。そんなルカの福音書にのみ、わたしを覚えてという表現が記されている。これは、イエス様の弟子として歩む者は、イエス・キリストを覚える者であるというメッセージが込められているのではないかと思います。イエス・キリストを覚えること、イエス・キリストが私たちにしてくださっていることを覚えること。これがイエス様を自分の救い主であると告白し、信じ、従い、キリストにのみついていく者が忘れてはいけないこととなります。

この時間は、「わたしを覚えて」ということに着目し、わたし、つまり、イエス様がどんな方であるのか、そして、聖餐式にあたって、覚えてとは、何を覚えるのかについて確認していきましょう。

本文1:「わたし」まことの人であり、まことの神であるイエス(ルカ8:22~25)

それではまず、イエス様はどんな方であるのかについて考えてみましょう。**ルカ8:22~25**

22 ある日のことであつた。イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、弟子たちは舟を出した。

23 舟で渡っている間に、イエスは眠り始められた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、彼らは水をかぶって危険になった。

24 そこで弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。イエスは起き上がり、風と荒波を叱りつけられた。すると静まり、風になった。

25 イエスは彼らに対して、「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

本文はイエス様のガリラヤにおける宣教活動の中での出来事を記している箇所の一部と

なります。イエス様は4ガリラヤ湖を渡り、ゲラサという異邦人の地に行くためガリラヤ湖を渡って行ったのです。ガリラヤ湖は海拔マイナス200mの低い位置にあり、湖の周りは四方を標高の高い山や丘で囲まれていました。そのため、突然激しい突風はよくあることだったといえます。特に周辺の山に大きな風が起こる時には、その影響により、標高の低いガリラヤ湖の波が吹き荒れていたのです。ガリラヤ湖は多くの漁師が集まる湖でもありました。周辺地域の食卓を支えるため、漁業が盛んに行われていたのです。漁師たちはこの突風に悩まされながらも漁業を行っていたこととなります。しかし、この時に突風はとても激しいものでした。イエス様の弟子の中には漁師だった者もいます。ガリラヤ湖での経験が豊富であるはずの彼らが慌てふためき眠っているイエスを起こしているのです。そのことからこの時に吹き荒れた突風がいかに激しかったのかを推しはかることができます。

23節を読んでみますと、この時のイエス様と弟子たちの姿が対正反対であることがわかります。弟子たちが死を覚悟し、慌てふためく中、何とイエス様は眠っておられたのです。イエス様は神の子でありながら、人としてこの世に来られた方です。だから睡眠をとる必要もありました。眠るということによってイエス様が人間として、人の間におられたということがわかるのです。人として生きたということは、人として死ぬということにもなります。嵐を前にして弟子たちは死の可能性を思いました。当然、人であるイエス様にも死んでしまう可能性があったということになります。イエス様はそんな中で眠っておられるのです。風が鳴り、水が打ちつけ、弟子たちがいくら騒いでも起きることはありませんでした。嵐の中でイエス様の心が平安であったことがわかります。それは、神様への信頼があったからではないでしょうか。死の危険や恐怖が目の前にあっても、神様に目を向けるなら平安を受けることができるのです。

弟子たちはイエス様を“先生”と呼びます。彼らにとってイエス様は先生、つまりは人であり、自然を征服できる力のある方ではなかったのです。彼らはイエス様の人である面しか見ていませんでした。人として尊敬し、すぎることはできても、神の子として信じ、すべてを委ねることはできていない彼らの姿を見ることができます。神様を知っていることと、信じていることの違いが舟の上でのイエス様と弟子たちの姿にあらわれていることとなります。私たちは主イエス・キリストが、父なる神のひとり子であって、聖霊によって宿り、処女マリヤより生ま

れたまことの神にしてまことの人であると告白をします。しかし、イエス様を人としてのみ受け入れているのなら、人の限界でイエス様を考えてしまうのなら、心に平安を得ることなど決してないのです。

24 そこで弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。イエスは起き上がり、風と荒波を叱りつけられた。すると静まり、風になった。

叱りつけという言葉がありますが、これをギリシャ語の聖書で確認すると3人称単数形になっています。ここで注目したいのはこの3人称の対象です。聖書においてこの単語はたびたび登場するのですが、この単語がイエス様を主語とする時、その対象はペテロ、悪霊、熱、湖でした。イエス様には人も、悪霊も、病も、自然も叱る権利があったことを意味します。この単語によって、イエス様にはこの世のすべてのものを征服する力があることが明らかになっているのです。マルコの福音書においてイエスが奇跡を行ったのはこれが初めてであり、この奇跡によりイエスが偉人ではなく、神の子であることが示されています。

自然の前に人間はあまりにも無力です。しかし、イエス様は風を叱りつけました。すると、風はやみ、すっかり風になったといえます。風とは水面に一つの揺れもない状態のことをいいます。あれほど荒れ狂っていた湖が、イエス様の言葉によって、波一つ起こらない状態になったのです。ここにイエス様の神の子としての姿があります。人にはできないことであっても、神にはできるのです。だからこそ、どんな苦難の中にあつたとしても、人生にどんな嵐が吹き荒れようとも、イエス様を信じる者は、より頼むことができるのです。

25 イエスは彼らに対して、「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

弟子たちの言葉を直訳すると、「であるなら、この人は誰なのか」となります。弟子たちはまだイエス様が誰であるのかを正確に知ることができていないのです。しかし、本文の出来事を通して今までの自分たちの認識に疑問を持ち始めることになりました。この時の彼らには

「まだ」信仰がありません。しかし、「まだ」ということはこれからどのように変化していくかが決定していないことでもあります。誰であっても、イエス様を見て、聞いて、体験することによって、自分が変えられ、信仰を得ることができるのです。“いったいこの方はどなたなのだろうか”。この質問の答えは信仰を持っているか否かによって変わることになるのです。

福音書が、いや聖書が何度も証しすることは、イエス様はまことの神であり、また、まことの人であるということです。イエス・キリストは“まことの、ただしい人間であると同時に、あらゆる被造物にまさって力ある方、すなわち、まことの神でもあられるお方”なのです。私たちはまず、このイエス様を覚えましょう。神であるのに人となられた方。それが私たちの信じるイエス様です。神であるのに人を愛し、人の姿をとられた方、それほどまでに人を愛して下さった方がイエス様なのです。私たちが覚えるべきは、まことの神であり、まことの人であるイエス様なのです。

本文2:「覚えて」仲保者イエス

では、そんなイエス様の何を私たちは覚えるべきなのでしょう。ルカ22:19~20

19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

イエス様はやがて自分が十字架につけられるということを知っていました。その上で肉が裂け、血が流れ出るということをしっておられたのです。十字架とは死の象徴です。罪の象徴であり、苦難の象徴であり、恥の象徴であり、何よりも敗北の象徴です。イエス様は弟子たちにそんな十字架の上で裂かれる肉と血を覚えなさいというのです。なぜならば、それが新しい契約となるからです。死の象徴が、罪の象徴が、苦難の象徴が、恥の象徴が、私たちの救い主であるイエス・キリストがかかったことによって全く新しいものになるからなので

す。

イエス様を信じる者にとって、十字架の意味は大きく変わります。罪の象徴だった十字架は、イエス・キリストがかかったことによって、罪の赦しの象徴となります。私たちの救い主、イエス・キリストが十字架の上で肉が裂かれ、血を流されたことによって、私たちのどうしようもない罪が赦されたからです。私たちはこれからも、罪赦される者になったからです。

日本の教会で大変馴染みの深い信仰問答にハイデルベルク信仰問答というものがありますが、その18番目にこのような内容があります。

問18 それでは、まことの神であると同時にまことのただしい人間でもある、その仲保者とはいったいどなたですか。

答 わたしたちの主イエス・キリストです。この方は、完全な贖いと義のために、わたしたちに与えられているお方なのです。

ハイデルベルク信仰問答においてイエス様は「仲保者」と表現されています。仲保者とは、神の前にまことの人として、罪の罰に服し、律法ののろいを受け、律法の要求を全うすることによって、人の義といのちを獲得して下さった方を意味します。人は神様に対する不従順によって墮落の状態にあります。誰も自身の力ではその罪から抜け出すことはできません。いくら足掻いても決してできません。人が罪から贖われるためには神様への完全な従順が必要ですが、それもまた、罪ある人間には不可能なことです。こういった理由で神性と人性が一致している方こそが救い主となるのです。まことの神であり、まことの人であるイエス様こそが私たちの救い主となり、贖い主となってくださるのです。

イエス・キリストがこの世に来られた理由は、私たちを救うためです。罪によって生まれながらに神様の怒りを受け、死ぬ以外の可能性がなかった私たちに与えられたのが、イエス・キリストの裂かれた肉と流された血です。その事により私たちは死から永遠のいのちを得ることができました。滅びから復活を得たのです。私たちはイエス様とともによみがえり、神様と交わりができるようになりました。罪の中で滅びに向かっていた私たちは、神様と何の接点

もない存在でした。暗闇の中をただただ歩んでいる者だったのです。そんな私たちに与えられた光、それが、イエス・キリストなのです。

その光によって、敗北の象徴であった十字架が、救い主を信じる者には勝利の象徴となりました。その光によって、罪悪感の象徴であった十字架が、救い主を信じる者にはめぐみの象徴となりました。その光によって、有罪の象徴だった十字架が、救い主を信じる者には自由の象徴となりました。その光によって、苦難、苦しみを象徴していた十字架が、救い主を信じる者には癒しと希望の象徴となりました。その光によって、死を象徴していた十字架が、救い主を信じる者にはいのちの象徴となりました。その光によって、醜くて仕方がない、嫌悪感を呼び起こす十字架が、救い主を信じる者にはなによりも美しいものになりました。イエス・キリストにある時、イエス様を自分の救い主と信じる時、十字架の意味はこのように変わるのです。イエス・キリストの肉と血を覚えるということは、私たちのために死なれたイエス様によって私たちが救われたことを覚えることです。私たちのために死なれた、その愛を覚えることなのです。

結論

イエス様はご自身の弟子たちに言われます。わたしを覚えてこれを行いなさい。私たちはイエス様の弟子となることを望むでしょうか。ならば、私たちの救い主であり、神様との仲保者であるイエス様を覚えましょう。イエス様の裂かれた肉と血の意味を覚える私たちとなるように切に願います。